

## 「即興型英語ディベート」で医学に挑む!

奈良県立医科大学 招聘教授 恩 知 忠 司

今年度、医学科2回生の「医科学英語」(Medical Science English)に「即興型英語ディベート」(Parliamentary English Debate)を導入しました。この講座では、グローバル社会を生きる医療人に必要不可欠な資質能力～英語の発信力、論理的思考力、社会問題への関心と幅広い知識、プレゼンテーション力、協働する力など～を総合的に育成することをめざしています。

毎時間のディベートでは、“Japan should legalize euthanasia.”(日本は安楽死を合法化すべきである。)、 “Online medical care should be actively promoted.”(オンライン診療を積極的に推進すべきである。)など、論題を医学・医療に特化し、肯定、否定チーム(各3～4名)に分かれて、立論の論理性を競いました。メンバーには、Prime Minister、Leader of the Opposition など、それぞれの役割と果たすべき責任が明確に決められ、ディベートの勝敗は、有資格ジャッジ(PDAより派遣)が決定します。

このディベートの特色は、論題がその場で発表されることです。発表後わずか15分間で、各チームが頭脳を結集して立論に取り組み、持ち時間一人3分全体で20分の英語ディベートに挑むのです。この即興性とハードワークが濃密な時間を創りだし、学生たちから驚異のパフォーマンスを引き出します。

「さすが医大生。基礎医学の講義で学んだことをすぐスピーチに盛り込んでいました!」「上達が早いからフィードバックにも力が入ります。」ジャッジからはそんな声が多く聞こえてきました。勝敗だけでなく、学生個人への適切なフィードバックもジャッジの大切な仕事です。

「英訳ではなくて、英語から入れるようになりました。」「無意識に論理の型を意識するようになりました。」「ディベートは楽しく、そして、英語にも医学にも役に立つ。得した気分です。」「いい医者になるには英語も必要だと実感しました。」学生たちのコメントがこの講義のすべてを表していると言えるでしょう。

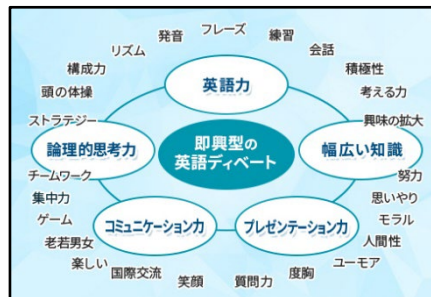
なお、この講座には、医学部長推薦のスーパーティーチャーによるオンライン講義もあります。今回は、新潟大学の齋藤昭彦先生と Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health の北野泰斗先生(卒業生)に英語で講義いただきました。奈良にいながらにして、グローバルに活躍するロールモデルに触れることができるのもこの講座の特色です。

To be a good doctor, an international perspective and a scientific inquisitive mind will be essential. I hope this class will be a good step toward students' ideals.

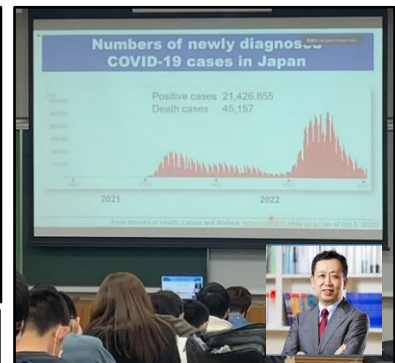
なお、「即興型英語ディベート」の詳細は、ジャッジを担当して下さった PDA(一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会)の HP (<https://pdpda.org/>) や『コミュニケーション場のメカニズムデザイン』(慶應義塾大学出版会)を参照してください。



学生のアイデアで机を三角形に配置してました。うまく考えたものです。



ディベート活動でさまざまなスキルや資質能力を鍛えることができます。(PDAのHPより)



齋藤昭彦先生のスライドです。分かりやすい英語の講義でした。